

アメリカ西部の人権感覚 ユタ・モルモン教のケース

淑徳大学国際コミュニケーション学部 高橋 弘

本稿は、十九世紀のアメリカ西部開拓時代に生きた人々が人権というものをどのように意識していたのかを概観することである。タイトルを人権ではなく「人権感覚」としたのは、人間の生命や財産、さらには言論や婚姻の自由などが漠然とではあっても当然の権利として人々によって意識され尊重されていたのではないかという推測の上に、当時の事例を集めて具体的に検討し、人権がどう意識されていたかを確認したいと思ったからである。

アメリカ西部開拓時代の人権を論ずることは今日のアメリカ人の人権意識を論ずることとつながる。なぜならアメリカ的民主主義は西部開拓のなかから派生したとするフレデリック・ジャクソン・ターナー説^{註1}（彼は、フロンティアで培われた個人主義と民主主義とは表裏一体の関係にあると解釈した。一般的に開拓前線をフロンティアと呼んでいる。）が今日にいたるまで一定の評価を得ているからで、仮にこの理論が正しければ、西部開拓時代の人権感覚こそ今日のアメリカ人がもつ人権感覚の原型であるといえるからである。

アメリカ西部と一口にいってもミシシッピ以西は極めて広範囲なので、本稿では地域を1847年から開始されるユタ準州に限定し、とくに生存自体が厳しかったと思われる開拓初期の20年を考察の対象とした。ユタ準州を選択したのは、歴史的資料が非常に豊富で検証が容易であるという理由からである。はたしてこれから検証されるユタ準州に生きた人々の感覚が、アメリカ西部の一般的な人権感覚と合致するかどうか、すなわち他のアメリカ西部諸地域に生きた人々の感覚と相似するかどうかという論証は、別の機会に改めて論じたいと思う。

アメリカ西部の暴力的文化

アメリカ史のなかで暴力が実際どの程度の広がりをもつものであったのだろうか。「アメリカには過去からつねに暴力がつきまわってきた。この点からみるかぎり（フロンティア）こそ、その暴力が一番はげしかった」という言葉で書き始められている『アメリカ・暴力の歴史』も、その著者ウィリアム・ホロンは、アメリカ社会がこれほど暴力的であるのはフロンティアがその原因であるというそれまでの通説を覆し、むしろフロンティアはその結果にすぎないという説を展開している（ホロン、10頁。^{註2}）。北米大陸に最初に到着したピューリタンにかぎらず、スペイン人も他のヨーロッパ人も、ピューリタン同様残虐で暴力的だったそうである。またイギリス支配下のアメリカでは法の無視と乱用は一般的であり、

その無法精神がやがてフロンティアにおける無法、リンチ、暴力、監督や裁判所嫌いへと発展していったのだとホロンは説いている^{註3}。

十九世紀のアメリカ社会は一般的に暴力的であった。ことにミシシッピーより西に位置する西部フロンティアでは(ここでの西部とは十九世紀に開拓がなされた地域のこと)では偶発的な行きずりの殺人や、自らを正義と自認する自警団による私的な正義(制裁、処罰)がどこでもみられた。自警団や自警を推し進める運動の支持者には、アメリカ社会のほぼあらゆる階層を代表する人々のみならず、アンドルー・ジャクソンやセオドア・ローズベルト大統領、その他上院議員、下院議員、州知事、知的指導者、法律分野の学者、名だたる弁護士、ビジネスマンがいた。

暴力とは、単純に言えば他者の人権を侵害する行為のことであるから、仮にアメリカ社会が早い時期から暴力的風土を培ってきたということであれば、それは同時にアメリカでは人々の人権が恒常的に奪われ侵害されてきた歴史だったということである。本稿は、暴力は人権を反映させる鏡であると考え、暴力にたいする考えや具体的事例をみていくことで当該社会がどのような暴力を是認してきたかを確認し、その裏に隠されている人権感覚を探ることにする。

ユタの暴力的文化とモルモン教とのかかわり

1847年から開拓が開始されるユタはいろいろな点で他の西部諸州とは異なっていた。一つには、ユタがモルモン教^{註4} という極めてアメリカの宗教を信奉する人々によって開拓された点、しかも数千人数万人という単位での単一集団による開拓であった点、さらにモルモン教団の指導者による明確なヴィジョンに基づいた組織的計画的開拓だった、という点である。開拓が組織的だった点を考慮に入れると、ユタでは暴力や犯罪が少なかったのではなかったかと考える人もいるだろう。最近あるモルモン教徒の歴史家はそれまでの暴力的モルモン教徒というイメージを修正するよう要求している^{註5}。しかし実際には、そうした修正の要求にもかかわらず、ユタは他の西部諸州よりもはるかに暴力的であったようだ。とくにユタでは、宗教的な動機による殺人が極めて多く、しかもそれが堂々となされていたのであった。個別的事例の検証に入るまえに、モルモン教とユタ開拓初期における暴力とのかかわりを見ていくことにしたい。

モルモン教団は暴力という点で、ユタ開拓初期に特異な次元を作り出したと言わねばならない。第一に、開拓の初期からユタには犯罪人を惹きつける無法な社会(社会秩序の欠如)は存在せず、自称自警団による法に基づかない処罰(正義)の必要性はなかった。ユタ開拓集団のリーダー、ブリガム・ヤング^{註6} の指導の下でモルモン教団はユタ開拓が着手されるほぼ一年前に、統治機構と司法制度を確立していた。しかしながら、それにもかかわらず、モルモン教団の指導者たちはモルモン教徒にたいして、敵対的な部外者(よそ者)やごくありふれた犯罪人、モルモン教の棄教者、さらには「死に値する罪」を犯した忠実なモ

ルモン教徒を司法に基づいて裁くのではなく、宗教的法に準拠し宗教的な手段によって処罰することを正しいと考え、一般信徒にたいしても公的、私的両面にわたって説得し教育に努めていたのである。

ユタにおける暴力には、その背景にモルモン教団の神権政治という文脈があり、どれが宗教的動機による殺人でどれがアメリカ西部に共通する宗教的動機とは無関係な単なる殺人なのか、その動機の区別と殺人の数を特定することが極めて難しい（1880 - 89 年に至ってさえ、ユタのサンファン郡に住むモルモン教団の指導者はモルモン自警団委員会を、郡警察とはまったく無関係に活動させていたという事例がある）。

宗教的な動機に基づく殺人は秘密裏に行われたものが多く表に現れていないし、司法の目から逃れられないほど外部に明るみにでた事件の場合には、モルモン教徒の判事の場合、彼の典型的な反応は訴えを却下することであったし、モルモン教徒の陪審員の場合ならその典型的な反応は被告人を無罪評決することであった。ユタに連邦軍が着任していた 1858 年から 1889 年の間、連邦から派遣された判事や連邦保安官が、動かぬ証拠に基づいて宗教的な殺人を調査し裁判に持ち込んだ事件もある。しかし、それにたいするモルモン教団の指導者たち、および教団のプロパガンダに用いられた教団所有の政治的新聞（デザレット・ニュース紙）の典型的な反応は版を押したように、こうした殺人の調査はその意図と行動において反モルモン的であると非難することであった。

モルモン教徒は個人的な経験やコミュニティの出来事をよく日記や手記に丹念な記録を残してきたことで有名であるが、宗教的殺人事件や殺人犯の名前を記録として残している日記はほとんどないと言われている。ユタ南部で起こったあの悪名高い「マウンテン・メドウの大虐殺」（後述）という宗教的組織犯罪についてさえ、ユタ南部に住んでいたモルモン教徒の日記にはそうした記録はなく、ただ沈黙を守っているだけである。

開拓初期のモルモン教徒のコミュニティに対してもたれている画一的イメージを少々変更する必要があるかもしれない。ユタ開拓初期のモルモン教徒は社会集団という点で一般社会とは大いに異なっていたし、さらにそこに集まった人間も多様であり複雑であった。反モルモン活動による苦難、指導者から繰り返し聴かされ従うよう説得されていた「血の贖罪」の教義^{註7}、復讐を讃える賛美歌の合唱など、こうした環境のなかで日々をすごしていたにもかかわらず、またモルモン指導者からうける祝福が敵に報復することの特権を約束していたにもかかわらず、ユタ開拓初期のモルモン教徒は概して暴力を避けてきたし、またコミュニティに起こる殺人にかんしては心を曇らせてきた、というのはおそらく本当であろう。またあるモルモン教徒は、自らの態度が生命の危険を招くことを承知で、血の贖罪や敵への復讐といった教義・慣行に従順ではなかった。

しかし同時にこうしたモルモン教団全体の方針や手段にたいする反対表明をただけで、そうした個人に生命の危険が迫るということ事態がユタ開拓初期のモルモン社会の特異性を現している。さらに、宗教の名によって堂々と暴力をふるい、あるいはそうした行為を

是認する熱烈なモルモン教徒が存在したことも事実である。こうした暴力の信奉者も、家庭や仲間内では優しく思いやりがあり、寛容で暴力とは無縁である人々だったのである。

モルモン教団の神権政治はある意味で反モルモンの攻撃への対抗措置としてとられた体制であると言えなくもないが、いずれにしてもこの神権政治がモルモン・コミュニティのなかで暴力を助長したことは疑問の余地がない。モルモン教が創設され形成されていく初期の段階では、ときには犠牲者であったモルモン教徒も、モルモン教団がある意味で王国としてのピーク期を迎えていたユタにおいて、多くのモルモン教徒は「モルモン教徒・対・敵」という図式に基づく暴力を当然と考え、実行していたのである。

暴力の担い手、あるいは法の執行者

ユタの開拓が開始されて三年目の1850年、ユタは準州として認められ、州憲法がつくられ州議会、立法機関、司法機関が設置された。準州の最高裁判所長官には異教徒（モルモン教徒はよそ者である非モルモン教徒のことを、異教徒と呼んでいた）であるレミュエル・ブランドンペリーが、同副長官には同じく非モルモン教とのペリー・ブロッカスが連邦政府から派遣され就任していた。またモルモン教徒のヘイウッドが連邦保安官に任命されていた。こうして形式的には世俗の司法と警察組織が整っていた訳である。1850年、ユタ準州の人口は六万人を数えた。

しかし住民の殆どをモルモン教徒が占めるユタにあって、その地に最大の影響力を振っていたのは教団組織のトップであり、カリスマ的グルでもあったブリガム・ヤングであった。そしてヤングは世俗の統治を嫌悪していた。ヤングはユタ準州の総督であったにもかかわらず世俗的な司法のシステムを無視し、モルモン教会が実質的権力をもつモルモン教会主導の統治を望み実行に移した。それがモルモン教団の「神権政治」である。したがってユタには二重の統治機構が同時に存在していた。連邦政府から信任された世俗の法や世俗的統治機構と、裏のそれである。そしてユタにおける暴力はその殆どが宗教的動機に基づく、モルモンの市民軍、ボディーガード、警察、自警団、さらには一般信徒によって引き起こされた暴力であった。

彼らが行動の基準にしたのは世俗の法ではなく、モルモン教の法、すなわち彼らの語る「神の法」である。それは著しく宗教的な色彩をおびた法であり、彼らによって引き起こされる殺人や暴力は世俗の法からすれば立派な犯罪であっても、モルモン教の原理や教理からすれば極めて正当な行為とみなされた。ユタ開拓初期のこうしたモルモン教の特異な教理のなかに「血の贖罪」と呼ばれる著しく暴力的な教えがある（註5を見よ）。

モルモン教のグルであるブリガム・ヤングは、私設のボディーガードや警備を身の回りに配備していたが、こうしたボディーガードには忠誠心があつく腕っ節の強い腹心の部下から登用された。その中にはモルモン教徒にさえ恐れられた、ウィリアム・ヒックマン（彼は、「荒くれ者のビル」と呼ばれていた）やホゼア・スタウト、オーリン・ポーター・ロック

ウェル^{註8} などのならず者や殺し屋も含まれていたし、腹心の部下であるウォレン・スノウ、ロット・スミス、ロバート・バートン、ウィリアム・キンボール、ダニエル・ウェルズ（ヤングの副管長、後のソルトレーク・シティ市長）も含まれていた。

ブリガム・ヤングはユタ総督という立場から、たとえばオーリン・ポーター・ロックウェルを終生の郡保安官に任命したが、その職は逮捕状の発行と法の執行（警察権）を同時にもつものであった。ロックウェルは早くから教祖スミスやブリガム・ヤングのために数々の暗殺や殺人にかかわってきたモルモン教団のために働くプロの殺し屋であり、西部開拓史のなかでも異色の人物である。ヤングはさらにロックウェルに無制限の権威を付与していたため、誰に何の相談もなく、勝手に人を殺害することができた。このため何ら正当な理由もなくロックウェルによって殺害されたモルモン信徒も多数にのぼっている。

異教徒・敵にたいする暴力

モルモンの特異な宗教的教理である「血の贖罪」は、モルモンの部外者をモルモンの敵とみなす教理を含んでいた。このためユタにおいてもっとも危険にさらされたのは異教徒（モルモン教徒はよそ者である非モルモン教徒のことを異教徒と呼んでいた）であった。それはモルモン教徒が「モルモン教徒・対・敵」という図式に基づく暴力を当然と教えられていたからである。なぜ異教徒が標的にされたかはユタ以前のモルモン教の歩んだ不幸な歴史と深く関係している。モルモン教の指導者たちが抱くルサンチマン（怨恨）の多くは自分中心にものを見る偏向した世界観に基づく一方的な敵意によって形成されたが、その敵にたいする敵愾心や復讐心はじつに深いものがあった^{註9}。

異教徒（部外者）にたいする暴力の記録は極端に少ないし、あったにせよその報告は概略を述べただけのものが多く、その数少ない事例の一つは異教徒の医師ジョン・キング・ロビンソンの殺害事件である。シンドラの研究によれば、モルモンの殺し屋ロックウェルが医師ロビンソンにたいするむごたらしい殺害の容疑者として捜査されていたという。

医師ジョン・キング・ロビンソンは連邦の陸軍大佐パトリック・コナーの要請で連邦陸軍の要塞フォート・ダグラスの付属病院軍医として東部から赴任、1865年から66年まで勤務。そこを除隊したのち元モルモン教徒の娘と結婚し、そのままソルトレーク・シティに定住し医院を開業していた。医師ロビンソンはユタ準州に始めての異教徒の（キリスト教の、モルモン教以外の）日曜学校を創りその校長を務めた。また彼はその地域きっての教養のある尊敬すべき異教徒の市民とみなされていた。しかし彼の土地をめぐるブリガム・ヤングと、さらには市警察との紛糾に巻き込まれていた。1866年10月22日の真夜中、事故による負傷者を診るために外出し、その直後自宅近くで殺害された・・・（誰一人証人として名乗りを上げないため）医師ロビンソンの殺害者の逮捕には9000ドルの報酬が約束されたが、一人の協力者も現れなかった・・・(Schindler, pp.344-5)

この事件はビッグラーがやや詳細に扱っている。ビッグラーが述べる医師ロビンソン殺害事件の概要は以下のようであった（以下、論文の要旨をまとめたもの）。

ソルトレーク・シティに住居を構えた医師ロビンソンはその界隈で評判の外科医であった。ロビンソンはソルトレーク・シティに最初の病院を建てようと土地を探していたが、市の1マイル北に位置するウォームスプリングとの境に立てようと考えた。ユタ準州の憲法では外部者による私的な土地所有を禁じていたが、連邦政府のホームステッド法はそのような規則を認めていなかった。またロビンソンの調査では、準州の土地に関する憲法は連邦委員会の認可を得ていない不完全な法であった。したがって医師ロビンソンは連邦法に従えば土地の入手は問題がなく、ホームステッド法に則りそこにバラック小屋を建て、公有地の先買権を入手した。

しかしブリガム・ヤングは異教徒によるユタの土地取得について、「私の庭（ユタ）に土地を得ようと居を定めるものは、かならず争いになるであろう。」「土地入手を計画して私の囲い込んだ土地（ユタ）に侵入する者は、私が追い返そう（I will send you home）」と警告していた（因みにビッグラーは、これを家に追い返すという意味ではなく、殺害するという意味だととる）。ロビンソンのバラック小屋は壊され、手を引くよう警告された。ロビンソンは弁護士バスキンを立てて裁判に持ち込んだが、判事タイタスはロビンソンの主張の正しさを理解しつつもユタ準州に有利な判決を下し上告を認めなかった。

ロビンソンはソルトレーク・シティ市長宅に談判にでかけた。市長はダニエル・ウェルズ（当時、ヤングの腹心の部下であり、ユタ準州の市民軍であるノーヴー軍の司令官であった。ノーヴー軍はモルモン教会の私設の警察隊でもあった）が新しく就任していた。ウェルズは面会にきたのが医師ロビンソンだと知ると、さっさと追い出した。数日後、就寝中のロビンソン宅のドアを叩くものがあり、落馬して馬の下敷きになり怪我をしたものの治療をお願いしたいという声が出た。姿は見えなかった。ロビンソンは患者の診察を断ったことがなく妻の制止を聞き入れずに、出掛け5分もしないうちに射殺された。付近住民の証言では、数人がモルモン神殿方面に走って逃げ去ったという。ロビンソンは血だらけで死んでいた。（Bigler, pp.247-53）

マイケル・クインの研究によれば、ヤングのボディーガード、ヒックマンの部下にジョージ・ストウリングムというモルモン教徒がおり、このストウリングムとヒックマンが医師ロビンソンを殺害したと、ストウリングムの甥がしぶしぶ認めた記録がある（Roberts, pp.194-99, 202-206）。

記録はここまでである。ロビンソンは結局、結婚し開業して数ヶ月のうちにユタで殺害されたことになる。モルモンの独裁者ヤングとトラブルがあったことと、ヤングお抱えの殺し屋によって殺害されたこと以外には、殺害の真の理由も含めすべて不明のままである。そしてこの事件の直後にソルトレーク・シティで新たな殺人事件が発生した。

同年12月11日、モルモン教徒で黒んぼのトムと呼ばれていたトマス・コルバーン、別名はコールマンがソルトレーク・シティから二マイル郊外にある古い武器庫の裏でバラバラ死体で発見されたのである。咽喉は耳から耳まで大きく切り裂かれ、その首が身体と皮一枚でかろうじてつながっている状態であった。被害者の胸には次のような警告文がピンで留められていた。「すべての黒んぼに告ぐ！白人女には近づくな！」。これを額面通りに受け取れば、黒人コルバーンは白人女に手を出したために復讐に遭ったことになる。

実際、同時代の歴史家アシルスは、コルバーンは異人種間通婚の熱烈な信奉者であり、それを追及したためにモルモン教の「血の贖罪」の処罰に基づいて処刑されたのだらうと述べている。同時にアシルスは、黒人トムには処刑された罪状に該当する事実はなら見つからなかった、とも述べており、黒人トムの殺害は誤った判断によるものであることを示唆している。以上がアシルスの記述である。

しかしその近辺に住む人々の中には、それは単なる表面的な理由であり、本当は別の理由で殺害されたのだと信じる者が少なくない。コルバーンはユタ準州内で起こった様々な殺人事件について、数人の連邦役人に内実を暴露しようとしたことが、ロックウェルとその手下によって殺害された本当の理由だとささやかれた。黒人トムが暴露しようとしていたことの一つが医師ロビンソン殺しの下手人に関することだったと信じられている。白人女の一件は、このむごい殺害の真意を隠すための単なるカムフラージュにすぎない、というのである……この殺害の裏にどんな陰謀があったかは知らないが、検死官はこの事件が犯人の捜査や立証にお金をかけるにまったく値しない事件とみなし、暴力事件簿に記入することさえ省いた。したがって公的な記録にかんするかぎり、何の犯罪もなかったことになった。黒人トムの葬儀は行われず、その死体は無名墓地のなかに放り込まれ、そのまま忘れ去られた (Schindler, pp.345-6)。

トムはモルモン教徒ではあったが、神権政治の原理で行動する教団からすれば連邦役人に密告するようなやつは、モルモン教団の裏切り者であり生かしておけないというのが殺害の理由であったと思われる。

しかし異教徒の殺人にかんする数少ない記録のなかにも比較的豊富な資料が残されているケースがある。その一つが、アメリカ史上でももっとも悪名高い「マウンテン・メドウの大虐殺」という集団殺害事件である。

この事件は1857年9月ユタ南部で起こった。アーカンソー州からカリフォルニアに向かうファンチャー隊の一行(約40家族、140人強)が、ユタ準州を通過する途中マウンテン・メドウズと呼ばれる山岳で休息している折に、モルモン教徒とインディアンに襲われ、17人の幼い子どもを除く全員が虐殺され、そのすべての財産が奪われるという事件であり、開拓民を襲いその金品財貨を略奪するという山賊まがいの行為が宗教の名によって行われた事件として全米を震撼させた事件であった(この事件の詳細にかんしては筆者の論文を参照のこと^{註10})。襲撃を受けた場面とその後の様子を、その事件にかかわった者

の子孫の手記から引用する。

インディアンの酋長たちと400名の勇敢なインディアンたちは、わが曾祖父ジョン・D・リーほか53名のモルモン教会のリーダーたちに加わり、マウンテン・メドウズにおいて移動の途上にある移民（開拓民）の一行を襲撃した。

熾烈な戦闘が始まった。しかし移民たちは幌馬車で円陣を組み勇敢に反撃してきたので、モルモン教徒とインディアンたちは驚いたのだった。移民たちは家族と自分たちを守るため必死の抵抗を試みたが、それがまるまる5日5晩に及ぶ苦しく恐ろしい戦いになった。短時間で簡単に決着すると思っていた襲撃だったが長引く消耗戦に疲れ果て、いったん退却し、教会の「戦争会議」を開いて協議を行い、この戦闘をいかに短時間で終結させるかが議論された。かれら移民たちを堅い守りからおびき出し、予め計画していた略奪を決行するため、モルモンの指導者たちは一計を案じた。それは移民たちに、もしも武器を渡し彼らの身をわれわれに任せるならセダー・シティまで安全に警護しよう、という誘いであった。恐怖におののき戦闘に疲れきっていた移民たちとその家族は、提案してきたモルモン教徒が白人であり、きっと友好的でインディアンから自分たちを護ってくれる味方に違いないと信じ、その提案を呑んだ（襲撃したのはインディアンたちとインディアンに変装したモルモン教徒だったから、移民（開拓民）たちはインディアンに襲われたと勘違いをしていたのである）。

こうして移民たちは塹壕から出て、それぞれの男性開拓民の横に一人のモルモン教徒が張り付き、キャニオン（渓谷）を一行になって歩いた。それから、「Boys, do your duty」という予め決められていた暗号の言葉が出されたとき、モルモン教徒たちは銃をもたない無防備な移民に一齐に襲いかかり、冷血にも移民たちを虐殺した。またモルモン教の長老たちはそれまでの銃撃戦で負傷し幌馬車の中で手当てをうけていた移民たちをも襲い全員虐殺した。また恐怖でおののき逃げ惑う女や子どもたちに対してはインディアンに殺害させ、その頭皮を剥がさせた。モルモン教徒が「罪のない魂の血」を流した責任をとらずに済むためであった（また、この事件がインディアンによるものであることをカムフラージュするためであった）。

このとき合わせて127名の男、女、子どもが、常軌を逸したモルモン教の長老たちすなわち彼ら全員がその地域の指導的長老や監督であったの手によって、またモルモン教徒によって獲物の家畜を奪うことを唆されたインディアンの手によって、無慈悲にも殺害されたのである。「マウンテン・メドウズの虐殺」として知られている、宗教指導者によって実行された卑劣きわまりない皆殺しの虐殺事件が、アメリカの歴史始まって以来前例のないもっとも血なまぐさく、もっとも冷酷な事件として記憶されている。これに匹敵するのは近年になって起きたガイアナにおける「人民寺院」の集団虐殺事件くらいなものだろう。

この惨たらしい虐殺事件の直後、モルモン教徒たちはインディアンたちの食事のために、

移民たちの家畜を殺し調理してインディアンに振る舞った。そうしてインディアンを食事に引き止めている間、他のモルモン教徒たちは移民たちのキャンプ地で所持品を略奪していたのである。彼らは騒々しく歓喜の奇声を発しながらポットやなべ、皿や衣服を漁っており、また他の者らは渓谷に冷たく血だらけで横たわる開拓民から、衣服、靴、金銭、時計、ナイフ、その他の貴金属を剥ぎ取っていた。そしてモルモン教徒を助けた勇敢なインディアンたちには豪華な食事と略奪品の一部が提供された。

翌日、戦闘による山のような略奪品 すなわち、多数の牛、幌馬車と馬、家財道具、宝石や貴金属、そして揺れ動く馬車のベッドの中に一つの固まりになって、目前で親を殺されあまりの恐怖と悲しみで泣きじゃくる17人の移民たちの幼い子どもたち(この子どもたちが助かったのは、まだ幼少なので決して虐殺者を訴えることはないだろうという理由による)

をセダー・シティに運ぶ、血しづきが付着し疲れきったモルモンの長老たちの姿は、おぞましく陰鬱な光景だったに相異なる。これらの子どもたちは、彼らの両親を殺害した、しかし良心の呵責にさいなまれたモルモンの長老たちの家庭に引き取られていった。

また、この虐殺のかかわったことによる罪の意識にさいなまれたせいなのか、セダー・シティのモルモン教会には虐殺された移民から略奪された品々が奉獻されたという (Thelma 'Granny Geer, pp.161ff)

初期のモルモン教の歴史に詳しい歴史家ジュアニタ・ブルックスは、この虐殺事件がセダー・シティの人々にいかに深く影響を及ぼしたかについて述べている。

「什一献金を収める事務所のまえに置かれた幌馬車や、多くの家庭に引き取られた孤児たちの姿が、セダー・シティの総てのモルモン教徒たちにマウンテン・メドウズにおける悲劇をつねに思い起こさせた・・・

いまや什一献金を収める事務所の棚には、サイズ毎に紐でくくられた多くの靴と、様々なキルトや毛布、種々の調理道具や皿や、衣服が置かれていた。そして、かつて血だらけだったシャツやドレスの話 何度も繰り返し水洗いと石鹸洗いされ、アイロンがかけられたシャツやドレスの話が、また、その仕事を命じられ、気持ちが悪くなって卒倒しそうになったけれど、気丈にも口をかたく結び、ただ黙々とその仕事をこなした女性たちの話が、ヒソヒソと小声で交わされるのだった・・・」 (Juanita Brooks , *John Doyle Lee*, p.225)

本稿の関心にしたがってこの虐殺に関する要点のみをまとめると、まず、これはモルモン教会が全面的にかかわった計画的犯罪であったことである。当時ヤングは、今日の統一教会同様、異教徒から金品を騙し取ったり奪ったりすることは悪ではなく、推奨すべきこととしていた。ユタでは「ふらちな悪党がここにやって来たら、そいつらの喉を掻っ切れ」とヤングは信徒を恫喝していた。マウンテン・メドウズで殺害されたファンチャー隊は今日の金額では数億円の財産(家畜や金貨など)を持ち、飢饉と物不足に悩まされていたユタ

のモルモン教徒には、見逃せないカモに映ったであろう。すでに数週間ユタを移動していたファンチャー隊がモルモン教徒に危害を及ぼす連中ではないことを知りつつ、様々なデマをとばして彼らを「敵」にでっち上げ、襲撃したのである。

計画的であったという理由は、虐殺事件に地域の教団トップ（ニーファイ・ジョンソン）の決断があったこと。当時ユタではヤングの指示なしに何事も為されなかったことを考慮すれば、ジョンソンが教団幹部に相談もなく決断するわけがなく、ジョンソンはその後何ら処罰を受けていない。

略奪された財産の多くは、そのまま教会に献上されたわけで、モルモン教会は、こうした歴史を経て、急激に豊かになっていったという指摘もある。異教徒からの略奪は、また、モルモン教徒がミズーリーやイリノイで失った財産を奪い返すための正当な行為と考えられていた。したがってブリガム・ヤングの主張では、この世では犯罪と映ることも、モルモンの法からすれば信仰に適った行為なのであった。

第二にブリガム・ヤングの恐怖心があった。新しく任命されたユタ準州の総督ジョンストン將軍と2500名の連邦軍は、ヤングの逮捕・処刑のために派遣されたのではないかと、ヤングは本気で疑っていた証拠がある。連邦役人が追放され、非モルモン教徒はユタから追放された。モルモン教団は西部に神権政治、独裁制をしき、ユタに連邦法と相容れない多妻婚（重婚）を実行し、それを信仰の自由と公言して憚らなかった。

モルモンの法が世俗の法より優れていると公言していたにもかかわらず、ヤングも本心では自ら連邦法に違反していることを、したがって場合によっては逮捕・処刑もありうることを知っていて、いよいよユタに新総督が派遣されること聞いたとき本心は恐怖でおののいていたはずである。だからこそ、ユタの自警団ともいべきノーヴー軍を3000人も用意し、自らの逮捕・処刑は何としても避けたいと考え、信徒たちに対立・戦闘意識を高める必要があったし、実際、ヤングはあらゆる手段を用いてそうしたのである。南ユタ、セダー・シティには使徒ジョージ・A・スミスが派遣され戦闘意欲を鼓舞していた。ファンチャー隊は、連邦軍のスパイであるという「デマ」が故意に流され、あるいは使徒パーリー・ブラットの復讐を果たすべきだと扇動され、それがモルモン教徒を冷酷な集団虐殺へと駆り立てたのである。

モルモン教の棄教者への暴力

ロバート・N・バスキンはオハイオ州出身の弁護士で、1865年にユタ準州にやって来て弁護士事務所を開業した異教徒の一人である。ブリガム・ヤングから「お前は猛禽の餌だ」（もうすぐ生贄になるのだ）という恫喝を受けていたにもかかわらず、勇気をもってユタとどまりヤングの専制的な神権政治にたいするもっとも果敢な挑戦者の一人となった。バスキンはユタ到着早々に、殺害された異教徒の医師ロビンソンの弁護を引き受けた弁護士でもあった。やがてバスキンは地域のモルモン教徒の信頼も勝ちとり、後年ソルトレーク・

シティの市長に選ばれている。バスキンはまたヤング時代のユタの歴史を著すが、その中に彼が見聞きした多くの事件について述べている。そこにモルモン教を棄教した三人の少年の話がある。その話をかいつまんで要約し、異教徒バスキンのコメントを紹介する。

その少年たちとは、コールヴィルに住むアイザック・ポッター、チャールズ・ウィルソン、ジョン・ウォーカーで、モルモン教を棄教していた。この三人は窃盗の容疑で数回逮捕されたことがあったが、当時サミット郡の検認判事だった判事スナイダーはいずれも証拠なしとして訴えを退けた。その後三人の少年は牛泥棒の容疑で再度逮捕された・・・武装した男たちがポッターの後から行進し、ポッターにはショットガンが押しあてられていた。ポッターは恐怖のあまり「人殺し」と叫び、男たちは至近距離から発砲しポッターは即死した。その時、ウィルソンとウォーカーは命からがら逃げだした。ウィルソンはウェーバー川で捕まり殺害された。ウォーカーは胸にかすり傷を負い手と手首に深手を負ったが追っ手から逃れ・・・キャンプ・ダグラス（連邦軍の駐屯地）に逃げ込んだ。司令官はウォーカーの話を聞いたうえ、彼を保護することにした。

サミット郡当局は、殺人犯逮捕のための何の策も講じなかった。ユタ準州の高等裁判所判事タイタスは、サミット郡をも管轄していたのでウォーカーから宣誓供述をとり、逮捕状を出して容疑者を逮捕させた。判事タイタスを前にした聴聞会でウォーカーや住民の証言を聞かされた。今、私（バスキン）が書き留めていることは、そこで聞いた事柄である。容疑者たちから出された唯一の理由は、ポッター、ウィルソン、ウォーカーが逃亡を図ったこと、だから撃たれたのだというものだった。ポッターの死体の耳から耳まで咽喉が切断されていたことを考えれば・・・そんな理由はばかげていてとても信じられるものではない。

ウォーカーはその後しばらくフォート・ダグラス（キャンプ・ダグラスの別名）に滞在し、容疑者が拘禁された後、大陪審の召喚がある前にコールヴィルの母を訪ねるといって駐屯地を後にした。しかしウォーカーは母を訪ねてはおらず、不可解な失踪をとげ、その後ウォーカーを見かけた者もうわさを聞いた者もない。容疑者の立件にはウォーカーの証言は不可欠であり、ウォーカーの失踪によって容疑者たちは完全な無罪放免になった。

ポッターが背中からしかも至近距離から発砲されて即死し、死んで地面に寝かされている死体の咽喉が耳から耳まで切り裂かれたように、ポッターのときと同様、多くの虐殺された被害者は、その咽喉を耳から耳まで切り裂かれている。

こうしたすべての事件は、モルモン教会の咽喉切断の説教と死の誓約による契約に端を発していることは、私のなかでは疑問の余地がない。これらの説教から発露している血に飢え乾く心・精神は、その発案者が復讐心と悪意の心をもつ人物であることを示している。そのような説教が語られ受け入れられている組織が、またそうした説教が後日その公的な機関誌に掲載され再確認される組織を、「末日聖徒イエス・キリスト教会」と呼ぶことは、イエス・キリストの神聖な名前をはなはだしく冒瀆することである。ブリガム・ヤングのこうした吐き気をもよおす説教は、キリスト教徒なら間違ってもそのようなことを口にするのではなく、

ヤングを神の使者とする主張が途方もなくばかげていることを物語り、そればかりでなく、支離滅裂で悪意に満ちた狂人を連想させるものである (Baskin, *Reminiscences of Early Utah*, pp. 9-10,110)

「死に値する罪」を犯した忠実なモルモン教徒への暴力

ユタ開拓初期のモルモン教団は神によるこの世の統治すなわち神権政治の確立を目指していた。それは同時にヤングが王として君臨する王国 (**kingdom**) であり、宗教的専制政治でもあった。この神権政治的専制国家を支配する宗教的ルール (「血の贖罪」) を遵守することが求められ、これに違反した場合は教団の制裁が加えられた。次に紹介する事件はたんなる噂に基づいてなされた奇怪な暴力事件である。ユタでは「セックス・シン」と呼ばれる罪にたいしもっとも過激な制裁が加えられた。「セックス・シン」とは、許可なく複数の妻を娶ること、異人種間通婚、同性愛、近親姦などである。

1858年4月、ペイソンのモルモン祭司と彼の兄弟 (郡保安官) 同じワードに属する数人の信徒たちが一団になり、近親姦を犯したという理由で22歳のモルモン教徒とその母親を射殺した。当時、ペイソンの町にはリーヴァイ・W・ハンコックというモルモン教団の幹部が住んでいた。リーヴァイ・W・ハンコックは、1834年の「シオン軍」のメンバー、1838年のミズーリーの「ダナイト団」メンバー、ノーヴー市警察官、1846 - 47年の「モルモン大隊」兵士 (メキシコ戦争に協力したモルモン部隊) 元ユタ準州下院議員、そしてブリガム・ヤングの「カウンスル・オブ・フィフティ」の古参メンバーであった。モルモン祭司と郡保安官が、教団内では高名でしかも彼らの叔父でもあるハンコックに相談もなくこうした「血の贖罪」を実行することはありえないことである。(Quinn, pp.253-4)

ユタきっての殺し屋オーリン・ポーター・ロックウェルの伝記を著したハロルド・シンドラの記述によれば、事件のあらまは以下の通りであった。

ジョーンズは、母親との近親姦を疑われ、手足などを切断されたあげく彼の母親とともに殺害された・・・(以下は、それに付記された註である)・・・このはなはだ奇怪な犯罪はモルモン教徒のあいだにセンセーションを巻き起こした。アシルス (Achilles) が書いた『モルモンの破壊の天使』18-19 頁によれば、ジョーンズはごく最近カリフォルニアから (ユタに) 戻ったばかりであるが、ソルトレーク・シティ界隈の住民 (モルモン教徒たち) は彼が母親と不自然な関係をもったというゴシップ (うわさ話) を流していた。... (以下の記述は、アシルスからの直接の引用部分である)

ロックウェル^{註1} は法を執行するために派遣された。酒場で友人とともにいるジョーンズを見つけた。ダナイト団の首領もやってきて、みんなで彼らの浮かれ騒ぎに加わった。酔いがまわってきた頃、ロックウェルとその手下はジョーンズを郊外におびき出し、ジョーン

ズを縛り上げ猿ぐつわをかませ、ロックウェルが彼をナイフで去勢した。ジョーンズはかろうじて家に逃げ帰り、その傷から回復した。それから間もなく、ジョーンズと母親はユタの南を通るルートでカリフォルニアへ向けて出立した。ソルトレーク・シティからおおよそ70マイル(約100キロ)行ったペysonという町で(ロックウェルとその手下に)追いつかれ、(おそらく、仕方なく)「ダグ・アウト」(どんな場所だったかはわからないが、土手に穴を掘ってそこにドアをつけただけの簡単な住まいだと思われる)で一夜を過ごすことにした。ロックウェルとその手下は、彼らが寝静まった頃、「ダグ・アウト」に忍び込んできたが、ジョーンズはドアが開く音で目を覚まし、襲撃してきた連中から命からがら逃げ出した。連中は先に母親を殺害し、その咽喉を掻き切った。それから連中はジョーンズを追いかけ、3マイル(5キロ)先で捕らえ射殺した。それからジョーンズの死体を「ダグ・アウト」まで運び、母親の横に並べ、ドアを壊して彼らの上にかぶせ、そのまま放置した。(Schindler, pp.289-9)

この事件にはもっと身近でこの殺害を見聞きしていたナサニエル・ケースの法廷で行った宣誓供述がある。ケースは1850年以来ユタ準州に住み、ジョーンズと母親が殺害された1858年4月15日当時には、ペysonの祭司チャールズ・ハンコックの家に下宿していた。以下はケースの供述である

殺人事件の前夜、祭司ハンコックの家の二階で秘密の会議が開かれた。チャールズ・ハンコック、ジョージ・W・ハンコック、ダニエル・ローソン、ジェームズ・ブラッケン、ジョージ・パッテン、プライス・ネルソンが会議に集まってきたのを見た。この会議は3週間前から、同じ場所で定期的に繰り返されていた。私はこの会議には加わってはいない、私はただの下宿人である。殺人事件のあった夜の8時頃、祭司ハンコックの家に人が集まってきた。顔ぶれは先に名前をあげた会議に参加していたメンバーであった。彼らは、今夜ジョーンズが馬を盗みにくるから牧場を守るのだと話していた。全員銃を持っていた。

私が上等なミニ・ライフルを持っているのを知っていて祭司ハンコックが貸してくれと言ったが、私は断った。この連中は全員そろって出かけた。彼らがいつ戻ってきたのかは知らない。翌朝、私はヘンリー・ジョーンズと母親が殺されたと聞かされた。日の出から一時間経ったころ、彼らが一夜をすごしたダグ・アウトに行ってみた。母親がわずかなワラが敷かれたダグ・アウトの地面の上に、殺されたときに身に着けていた服をまとめて横たわっていた。額の真ん中から撃たれており、頭には銃弾が貫通した穴が開いていた。15分か20分経ったとき、ヘンリー・ジョーンズが運ばれてきて、彼女の横に置かれた。それから彼らは古い毛布、古いフェザー・ベッド、ダグ・アウト(のドア)を引き剥がし、ジョーンズと母親のうえにかぶせた。

殺人事件のあった次の日曜日、ペysonのモルモン教会の集会で、祭司であるチャールズ・ハンコックはジョーンズとその母親の殺害について、そんなことは何も気にしちやーい、ことによっては日が明るいうちにやったってよかったんだ、と語った。これは講壇の

上から語られたのである、そしてそこには150～200人の信徒が集まっていた。ハンコックには彼らを殺害する何の理由もなかった。私が言えるのはこれだけである。(Kirk Anderson's Valley Tan, P.2)

近親姦を疑われて、ヤングのボディガードである郡保安官だったロックウェルとその地域のモルモン教徒によって殺害されたジョーンズと母親であるが、母親が育てていた子どもがはたして誰の子だったのかは確認されていない。ジョーンズと母親は何らかの理由で地域のモルモン教徒には嫌われていたようである。それがデマを流布された原因だったと推測される。そのデマが真実かどうかはユタではさほど重要ではなかったようだ。そうしたデマが流布されるようなモルモン教徒は、処罰にふさわしいというのが真実だったのかもしれない。別の表現をすれば、宗教的な動機に基づく殺害には表の理由と裏の理由が存在し、モルモン教団は宗教的動機が世俗の権威やジャーナリズムに露見しないよう、意図的に偽りの理由や証拠を用意していた、ともいえる。

さらにモルモン教にとって「性」は相当に複雑なテーマであり、簡単に論ずることはできない。早くから実験された多妻婚を始めとするモルモン教の「性」をめぐる慣行は、一般信徒から「性」の自由を奪い、それを管理することを意図していた。一方では教団の指導者たちを中心とする一部の特権階級の間での性の放縱があるかと思えば、他方では一般信徒にたいしての厳しい性の制限が存在していた。放縱と制限は秩序立てて守られていた訳ではなく、かなりの程度恣意的に実践されていた。

ユタではじめてモルモン教会の正統な教義となった「多妻婚」は、信徒の救済の教義と密接に関係づけられており、一人の男性が数名から10名、場合によってはそれ以上の女性を求める必要があった(女性は、信仰における高位の長老との婚姻が、来るべき天における救いの確かさと結合されていたから、真面目な信徒は高位の年配者を婚姻の相手に選ぶことが多かった。これは教団指導者が若い女性を容易に得るための方便でもあった)。そのため、女性をめぐる若い信徒とすでに妻を持つ長老との奇妙な競争が展開され、多くの場合、長老の説得に従わずに女性を求め続ける若い信徒を待ち受けていたのは、カストレーションすなわち去勢という処罰だった。

1859年、ジョン・フェルプスという連邦陸軍兵士の日記の中に、カストレート(去勢)された青年の話がでてくる。その日記によれば、3月21日、二人の若者がモルモン教徒によってカストレートされた後、連邦陸軍の駐屯地に逃げ込んできた。そのうちの一人は「デーンという名のハンサムな若者」で、彼はある少女(**girl**と記されているが、はっきりした年齢は不明である)に求婚をしていた。しかしあるモルモンの長老がその少女を(複数婚の相手として)欲していた。その長老はライヴァルであるこの若者を処理するために、この若者が「獣姦を行ったと言いふらし、若者を(部下の手で)カストレートさせた」のである^{註11}。この記述のなかには、この二人の青年がモルモン教徒であったかどうかは記さ

れていないが、わざわざ「モルモン教徒によって」カストレートされたと書くところを見ると異教徒だったのかもしれない。

かつて「ダナイト団」のメンバーでヤングのお気に入りだったジョン・D・リーの手記のなかに、「血の贖罪」にしたがって処刑された青年の話がある。リーの明瞭な説明のおかげで何が起こったのか手に取るように理解できる。

モルモンにとって致命的な罪は姦淫の罪であった。この罪のためにユタでは多くの者が殺害された・・・ロスモス・アンダーソンは・・・自分より年上のある未亡人と結婚した。この未亡人にはすっかり成長した娘が一人いた・・・この娘は義理の父であるアンダーソンとの結婚を望み、アンダーソンもこの娘を二人目の妻としたいと望んでいた。彼女は美しい娘だったので〔その地の監督である〕クリンゲンスミスは彼女を娶りたかったが、彼女は結婚を断った・・・ある集会でアンダーソンとこの娘は姦淫の罪を犯したことを告白した。この事実を知ったならプリガム・ヤングがきっと二人の結婚を許してくれると思ったからである。告白の後、二人は再び洗礼をうけモルモンの会員へと迎えられた。そして再び同じ過ちが繰り返えされたならアンダーソンは死ななければならないという誓約がなされた。

しかしその後間もなく義理の娘にたいする姦淫のかどでアンダーソンは評議会にかけられた。この評議会はクリンゲンスミスとその二人の副監督により構成されていた。それは監督（監督とはワードの責任者のこと。教会の無報酬の牧師のような立場）の評議会であった。この評議会はアンダーソンに〔神の〕契約を破ったかどで死を言い渡した。クリンゲンスミスはアンダーソンの所におもむき、自らの罪を贖うために血を注ぎ咽喉を切って死ぬべき決定が下されたことを告げた・・・アンダーソンの妻は、アンダーソンがその罪のために殺されることと、埋葬のさいに身につける清潔な衣服を用意するよう告げられた。クリンゲンスミス、ジェームズ・ハスレム、ダニエル・マクファーランド、ジョン・M・ヒグビーがセダー・シティの近くの野に墓を掘り、夜中の十二時ころアンダーソンの所へ赴き死の準備をするよう命じた・・・かれらは用意された墓へ行った。アンダーソンは墓の傍らにひざまずき祈った。それからクリンゲンスミスとその部下たちは、アンダーソンの咽喉を耳から耳まで切り裂き、首を持ち上げて血を墓のなかに注いだ。

かれが死んだ後、衣服を取りかえ墓に投げ入れ埋葬した。かれらは血だらけの服を家族へ持ちかえり洗濯をするように言った。またアンダーソンの妻には夫はカリフォルニアにいと嘘をいうように教えた。彼女はその命令を守った。

セダー・シティでは評議会が異端を問いたです評議会の命令がないかぎりこのようなことは成されたためしかなかった。わたし〔リー〕は直ちにアンダーソンの死を知らされた・・・当時、アンダーソンの殺害は宗教的義務であり正しい行為であるとみなされた。そしてこの件はすべての人によって正しいこととして了解された。なぜならすべての人は同じ契約によって結ばれていたからである。また契約を破った男の処罰にたいするほんの小さな異論の声

も、それを発した者に同様の運命がふりかかった。というのは教会当局の命令により執行されたことにたいして、あえて異議を唱えるほどかれは愚か者であったからである (John D. Lee, *Confessions of John D. Lee* , pp. 282 - 83)

結語

アメリカ西部の人権感覚を論証する目的で、人権のネガともいべき暴力について具体的エピソードを例にとりながらみてきた。とりわけユタ準州開拓初期の歴史を見てきたわけであるが、紙面の関係で取り上げることのできなかつた事例も多く残された。とくにユタでの宗教的ルールの上重基準について、あるいは多妻婚をめぐる教団のルールとそのルールに違反した者にたいする教団の処罰について、あるいは教団指導者にたいして異論を唱えた場合の結末について、あるいはモルモンの自警団組織とその活動について、そして人種間のトラブルについてほとんど論証できなかつた。これはまた別に機会に改めて論ずることにしたいと思う。

外部の者がユタ準州をどのように見ていたかを知る一例は、先に引用した法律家で後のソルトレーク・シティ市長ロバート・バスキンであろう。バスキンはメイン州で生まれ東部で教育をうけカリフォルニアを経由してユタにやってきた教養人の一人であったが、バスキンの次の言葉にかれのユタの印象がよく表現されている。

「こうしたすべての事件は、モルモン教会の咽喉切断の説教と死の誓約による契約に端を発していることは、私のなかでは疑問の余地がない。これらの説教から発露している血に飢え乾く心・精神は、その発案者が復讐心と悪意の心をもつ人物であることを示している。そのような説教が語られ受け入れられている組織が、またそうした説教が後日その公的な機関誌に掲載され再確認される組織を、「末日聖徒イエス・キリスト教会」と呼ぶことは、イエス・キリストの神聖な名前をはなはだしく冒瀆することである。プリガム・ヤングのこうした吐き気をもよおす説教は、キリスト教徒なら間違ってもそのようなことを口にするのではなく、ヤングを神の使者とする主張が途方もなくばかげていることを物語り、そればかりでなく、支離滅裂で悪意に満ちた狂人を連想させるものである」 (Baskin, *Reminiscences of Early Utah*, p.110)

東部出身の教養あるバスキンの目には、ユタで繰り返されている犯罪と暴力が人間にたいする悪意に満ちた仕業であり常軌を逸した人権侵害にみえたであろう。ユタの人間が一人の宗教的狂人によって支配され、人々がいとも簡単に殺害されている光景は尋常ならざるものであったに違いない。しかし当時のアメリカでは、そこが西部でなくても、一握りの人間が巨大なカネや権力を握りアメリカ国民全体の命運を左右していたことを考えれば、ユタの光景だけがことさらに異様な光景だったとはいえないはずである。

最後に、ここまでの議論からある意味で明瞭になったと思われる事柄についてまとめ、結語にしたい。

第一に、法（正義）と司法（法の執行）が社会の権力者の手中にあったこと。人権の中身を決定したのはこれらの権力者とその取り巻きであった。ユタの民衆は、同時に合衆国人民であったから連邦憲法の修正条項で謳われている人民の権利を当然保障されているはずであるが、それは単なる掲げられただけの理想であって現実はそうではなかった。ユタを含めたアメリカ西部を支配していた正義の内実は、地域によって大きく異なっていたと思われる。こうした恣意的な正義から身をまもるには権力者に迎合するか、連邦陸軍に逃げ込むとか、他州に移動する以外にはなかった。

第二に、力が正義であったこと。とくに開拓初期には自衛手段をもたない個人はつねに危険にさらされた。とくに権力者が警察権をもち、その周りに自警団やボディーガード、殺し屋などを置いて社会秩序を保っていた場合、とりわけヤングのように社会にたいして専制君主のように振舞った場合、個人はかぎりなく不安定で危険な立場に立たされた。こうして生命や財産権というもっとも基本的な人権も容易に剥奪されたケースもあった。

第三に、個人の人権が恣意的に剥奪された場合、ことに生命を奪われるというような人権侵害があった場合、その正義の回復（犯人の逮捕や裁判）は期待できなかった。ときの権力者に対抗しうる連邦から派遣されている判事などの助けを借りる以外に有効な手段はなかったであろう。そして合衆国では今日にいたるまで加害者の人権は手厚く保護されているが、それに反し暴力や犯罪による犠牲者の権利保護はけっして十分ではなく、そのまま放置されている。

最後に、モルモン教という男性優位を原理とする白人主義宗教における黒人や女性の人権についてはまったく論証するスペースがなかった。ただ一言付言するなら、ユタは全米でももっとも黒人差別が激しかった州であったし、女性にかんしてはユタは西部でもっとも早く女性に参政権を付与した州であった（そこには複雑な事情がからんでいた）が、女性の権利獲得にかんしては、ユタはもっとも保守的な州であった。

[付記] 1860年代に突入してから、モルモン教徒以外のユタの人口が急増するに従い、宗教的動機のもとづく殺人件数は減少していくが、モルモン教徒によるリンチ事件のほとんどが宗教がらみ、人種がらみの事件であった。1889年にいたるまで、モルモン教会の出版物には、非モルモン教徒への暴力的攻撃を喝采する記事が載せられていた。

1889年には、モルモン教団の大管長会が神権政治を目指してきたそれまでのあり方を公的に撤回することを公表した年である。その翌年、1890年はユタが初めて州へと昇格し、その代価として「多妻婚」の放棄を公的に宣言し、モルモン教の政治政党を解散した年である。この州

昇格と、それに伴う連邦への正式加入を契機として、ユタ州はこれ以降その暴力に依存した文化を急いで脱ぎすてる努力を傾けていく。

註

註¹ Frederick Jackson Turner "The Significance of the Frontier in American History", 1893

註² ウィリアム・ホロン『アメリカ・暴力の歴史』10頁。ホロンはミズーリー州における住民によるモルモン教徒への迫害について述べているが、モルモン教徒の手による放火、暴力については全く触れていない。またその後のイリノイ州ノーヴーでの事件、ミズーリー州知事リルバーン・ボッグズにたいする暗殺未遂事件、ユタ州での連邦政府との摩擦、「マウンテン・メドウの虐殺」と呼ばれるモルモン教の指導者の指示による百数十名の開拓者の虐殺、その他のモルモン教の指導者、信徒の手による殺人、放火、暴力、虐殺事件には全く触れていないという点では、ひどく片手落ちの記述であるというべきである。

註³ 同、第一章の注1

註⁴ 初期のモルモン教をイメージするには、独裁的グルによって統制されていた時代の「オウム真理教」をイメージするのが近道であろう。その独自の選民思想や終末思想、そしてオウムの信者と部外者を分ける二元論に基づき、オウムを批判する者を邪魔者として制裁を加える行動パターンは、モルモン教ときわめて類似している。

モルモン教とは、十九世紀初期、ある開拓民の息子〔ヴァーモントにて誕生〕によってニューヨーク州にて1830年に始められる宗教であるが、平均的アメリカ人同様この宗教も各地を転々とす。翌年オハイオ州へ、1833年にはミズーリー州へ、その後数年はオハイオとミズーリー両州にわたって活動し、ついにミズーリー州から追放されてイリノイ州に逃げ込み、やがて諸般の事情から未開の土地であったメキシコ領ユタへと移住するのである。フロンティアの西進運動とともに移動したこの特異な宗教は、アメリカのフロンティアで生まれた宗教であり、暴力という点でも非常にアメリカ的であったといわなくてはならない。

註⁵ Ronald W. Walker, pp.17 ff. 十九世紀のアメリカ社会は一般的に暴力的であったことから、ウォーカーは「初期のユタにおける法を無視したさまざまな暴力はこうした視点から理解されるべきだ」と述べる。たとえばテキサス、ニューメキシコ、ジョージアでは、夫による妻の情夫の殺害は罪に定められなかった。こうした観点から、最近あるモルモン教徒の歴史家は修正主義による歴史によって、「精神的に不安定で、迫害熱にとりつかれ」「殺人を実行する権力をもっていた」開拓初期のモルモン教徒というステレオタイプのイメージを、温和な被害者というイメージに変えられるべきだと主張する。ユタ開拓初期の暴力の多くはユタ以外の西部の暴力と相似しており、あるモルモン教徒でない歴史家でさえ、あまりに悪名高い「マウンテン・メドウの大虐殺」という組織的虐殺事件を別にすれば、犯罪の裏の宗教的動機を割り引いて考えるよう努めていた。さらに別の歴史家は、モルモン教徒が「血の贖罪や復讐」を推進する環境の中に置かれていたにもかかわらず、モルモンのコミュニティにおける暴力のレベルは、他の西部地域からすれば決して高くはなかった、と述べている。

註⁶ ブリガム・ヤング(1801-77)・・・モルモン教の二代目グル(大管長)。ユタ準州初代総督(知事)。モルモン教創始者ジョセフ・スミス死後、分裂しそうなモルモン教徒をまとめ当時メキシコ領ユタに導く。ユタの地に世俗の政府を置きつつ、実際にはユタを独立したヤングの独裁国家(より正確に言えば、ヤングを国王とするモルモン王国)を建設しようと試みた。しかし連邦政府を敵視する姿勢と多妻婚が連邦政府と相容れず、摩擦を繰り返す。ヤングはカリスマ的宗教指導者であり、その信徒の上に無限の権力をふるい、巨額の資産と多数の妻(50名以上といわれている)を所有していた。ブリガム・ヤングは評価の分かれる人物で研究者の間での論争が多く、伝記は多数出版されているが決定的伝記はまだない。

註⁷ 高橋 弘『モルモン教と暴力』を参照

註⁸ オーリン・ポーター・ロックウェル・・・教祖スミスやブリガム・ヤングのために数々の暗殺や殺人にかかわった、モルモン教団のために働いてきたプロの殺し屋。西部史のなかでも異色の人物。この当時、ロックウェルはユタ準州の副執行官の職にあったため、逮捕状の発行と法の執行を同時に行うことができた。さらに、モルモンの大管長ブリガム・ヤングはロックウェルに無制限の権威を付与していたため、誰に何の相談もなく、勝手に人を殺害することができた。このため、ほとんど何ら正当な理由もなくロックウェルによって殺害されたモルモン信徒も多数にのぼっている。

註⁹ 高橋 弘『素顔のモルモン教』のなかの「モルモン教の歴史」を参照

註¹⁰ 高橋 弘「テルマ・ギアーの語る『マウンテン・メドウの虐殺』」

http://garyo.or.tv/kakure/meadows_takahasi.htm

註¹¹ John W. Phelps diary, 28 March 1859, Utah State Historical Society

参考文献

- Affidavit of Nathaniel Case, Sworn to and signed before me this 9th day of April, 1859, John Cradlebaugh, Judge 2nd Judicial District Court, Kirk Anderson's Valley Tan, (Salt Lake City), 1859
- John D. Lee, Confessions of John D. Lee, 1880, photomechanical reprint of Mormonism Unveiled; Utah Modern Microfilm, Salt Lake City
- Frederick Jackson Turner "The Significance of the Frontier in American History", 1893 (フレデリック・J・ターナー「アメリカ史における辺境の重要性」『アメリカ史における辺境』(松本政治・嶋忠正訳) 北星堂書店、1973年)
- Bill Hickman, Brigham's Destroying Angeles: Life, Confession, and Startling Disclosures, Photomechanical reprint of 1904 Edition; Utah Modern Microfilm, Salt Lake City
- R. N. Baskin, Reminiscence of Early Utah, Salt Lake City, 1914
- Harold Schindler, Orrin Porter Rockwell: Man of God, Son of Thunder, University of Utah Press, 1966
- Thelma 'Granny' Geer, Mormonism, Mama & Me, Moody Press, Chicago, 1979
- ウィリアム・ホロン『アメリカ・暴力の歴史』(中山容, 他訳) 人文書院, 1992
- 高橋 弘「モルモン教と暴力 アメリカ西部開拓時代におけるマカベア型宗教の形成」『ICU比較文化』ICU比較文化研究会、26号、1994年
- 高橋 弘『素顔のモルモン教』新教出版社、1996年
- 高橋 弘「ユタ準州開拓史」『国際経営・文化研究』vol.7, 国際コミュニケーション学会、2003年
- D. Michael Quinn, The Mormon Hierarchy: Extensions of Power, Signature Books, 1997
- David L. Bigler, Forgotten Kingdom: The Mormon Theocracy in the American West 1847-1896, Utah State University Press, Logan, Utah, 1998